

風土を温める あたた

シリーズ 高山の文化財 ①

【国指定重要文化財】国分寺本堂

国分寺の本堂は、室町時代の建造物で、高山市内では最も古い建物です。金森時代（天正時代）には一度修理され、安土・桃山期の様式に変えられた部分が見られます。

境内にはもともと、奈良時代に建てられた大きな金堂がありましたが取り壊され、少し規模の小さな現在の本堂が建てられました。また、奈良時代の境内はたいへん広く、現在は、当初の八分の一くらいの広さとなっています。

建物の第一の特徴は、国分寺としての風格を備えた室町時代建築様式を持つことです。緑色の連子窓、丹塗の丸柱、屋根下の斗栱（組物）が目を引きます。内部は、内陣、外陣に分かれていて密教寺院らしさを出し、内陣には国指定重要文化財の薬師如来座像、観世音菩薩立像などの仏像が安置されています。たい



薬師如来座像（国指定重要文化財）

われる「大イチョウ」をはじめ、文政四年再建の「三重の塔」や「鐘楼門」「表門」「絵馬額」「神鏡」「鯛口」「梵鐘」「飛驒匠像」など多くの指定文化財があります。

また、本堂の内部には国指定重要

文化財の仏像が二体安置されています。文化財の保有件数は市内でいちばん多く、古代から金森時代、幕領時代に至るまでの長期間にわたり、信仰・歴史文化の拠点になってきたといえるでしょう。

聖武天皇は、七三七（天平九）年、当時六十八あった国ごとに、丈六釈迦三尊像の制作と、大般若経一部を写す命令を出しました。当時国内には疫病やききんが頻発し、内外の政情も不安定でした。天皇は、鎮護国家（国

へんおごそかな内部空間で、真言密教の歴史を深く感じることができま

す。国分寺には、樹齢千二百年ともい



昭和初期の国分寺境内

所有者 国分寺
所在地 総和町一丁目八三番地
時代 室町時代
寸法 桁行五間（一一・四メートル）、
梁間四間（八・六六メートル）、
向拝一間（三・三三メートル）、
四方に廻縁がつく
屋根は銅版葺
（注）一間は柱と柱の間のこと
【見学】希望者は受付（庫裏）へ申し込む（当日可）。行事などがある場合は見学できないこともある。